

目的 大正期は明治と現代には違つた谷間へ期で、影のうかい時代といわれる。果して言うであらうか。大正期は大正デモクラシーの高揚や、婦人解放の活発な動きがみられ、いわゆる大正文化をなまし、明らかに特色ある時を形成したといえる。大衆文化、ひいては女性文化とまでいわれる庶民文化の定着の中、女性はどうなされたか。それは今日の私運と関連した重要な課題である。そこで本題を「選んだ」のはその理由からである。

方法 主として大正期刊行の新聞紙上から選んだ。

結果 明治が身分的上層階級の文化輸入の時代とすれば、大正は一般庶民階級の文化定着の時代といえる。それは女性にも及ぼした。大正は女性の時代とまでいわれる程に存った。同時に大正デモクラシーの波をうけ、婦人運動は、分裂状態でありついで、様々な形で高まったのである。しかし大切なことは、そうした動きが、主として都市を中心としたもので、地方では、まだまだ「家」制度的、家族の呪縛から解放されるにはほど遠いものであった。文化的風潮が押寄せれば、却つて伝統的人間関係の中の女性の立場は苦しく存った。それが心中存どしいう結果においこまれる=にも存った。マスコミの発達による飛躍、良妻賢母主義による閉鎖、二の一面をもつ女性が、つかの間の平和(第一次大戦の参戦は殆ど戦争意識欠)の中になされたのが大正だった。時に、女性文化の時代ともいわれる一才、まだ解放されな一面をもつのが、まだ現代女性である今、それらがいわれる、大正期を基礎にしたものである=を(明治でなく)考へあかせる=が必要である。平和にならざるためにも大切な=とあり、大正時代の婦人像を探究した。